

## 若佐にあった

### さむらいの道場の話？

この面白い話をしてくれたのは、明治三二年生れで、現在の武士三六号の、サロマ別川近くに、数え年一〇才の時、両親と共に明治四〇年に移住した武士の、青木太四郎一行とは別だが同年の入植草分けの人。山越末五郎と言う方でした。

『わしが未だ十四・五歳ごろだ。武士付近にも家があちらこちらと建ち始めたら、行商人もぼつりぼつりとやって来るようになって来た。

或る年の秋、旅の行商薬屋がやって来た。未だあの頃は、他所から人が来るのが珍らしい頃、薬屋と親父との話しをしているところに何んとなくわしはやって来て、話を聞いていたら、薬屋は、

「こんな田舎の林の中に、さむらいの修業道場があるのに驚きましたよ、この当りでは一寸大きな建物があつて。その手前に一寸広い庭があつて、道路から五〇間も離れている位いかな。道路から道場に行く入口に、門柱を立てられて、その門柱に「武士教授所」と墨で太い字をかかれていますよ。内地から移住して来た士族の人達が、先祖からの武道の心得を忘れられなくて、修業しているのせうかね。」

この話を聞いた私の親父は、

「あ、それですか、それは、この当りの子供が勉強に通っている学校ですよ。」

「へえ、あれが学校というと。」

「内地からここに移住して来たら、何も無い荒地、学校も役場もないが、子供は義務教育の小学校に行かねばならないが、子供の数が余りにも少ないので、やっと小学校とまでならなくて、教授所ということで認められたのがそこなのです。」

私（この原稿の筆者）は、一寸変わった話があるとその話に入り込む癖があるので、山越末五郎さんに、

「その薬屋はそのとき年いくつ位だったかね。」と聞いたら、「四〇歳は越えていたが四四・五歳位だったか。」

「それ位の年だったら、明治になるかならないかの頃生れた人となるね。その人の子供の頃からの生長の過程の環境によつたら、当りの家々の建物より大きくて、少し広い庭があつて、道路からその建物までの行く道の入口の門柱に、「武士教授所」と書かれていたら、行商人となつて、旅から旅の言い方を変えて言えば、放浪の身、誰もが旅空で故郷での幼い頃を懐かしく思い出すように、その旅の薬屋は、明治の末期佐呂間の原野に踏み込んで、荷物を背にして、下うつむきつつ歩いていて、ふと「武士教授所」の門柱に書かれた文字に、何んとなく自分の過去が蘇つたのでせうね。」、今の若佐小学校のことに、こんな隠れた話がありました。



語り手 山越末五郎  
文責 徳永 良行

## 駅通・佐呂間の 先人に関係深い分

現在の、佐呂間町に住んでいる人の、先祖が利用もし関係あったと思われる駅通を、記して見ると

鑑沸駅通が、明治一六年一月三日業務を開始して、廃止されたのは、明治二五年三月三十一日、佐呂間近辺では一番古い、鑑沸駅通が廃止になって二年後に、一番最初に定住した鈴木甚五郎が、浜佐呂間に入植している。

常呂駅通は、明治二五年三月二五日業務開始して、昭和五年六月十日廃止されている。佐呂間の先祖は、戸長役場で大正三年まで用件の関係あったから、常呂駅通に大分世話になってるだろう。

ワッカ駅通は、サロマ湖とオホーツク海の間の砂丘の方にあつて、国道二三八号がその方を通っていたというから、海岸の方を伝つて来た佐呂間えの、移住者は世話になってるでせう。業務開始は、明治二五年五月一日で、廃止は、大正九年一月三十一日廃止ころは常呂町管轄、上佐呂間駅通は、可成り佐呂間町内の、移住者が関係深いところだったと聞いている。場所は、現在の留辺蘂町字花園、現在の五五号のところに「遠藤」という家のところに、先の「佐呂間駅通跡」の碑が建てられている。業務開始は、明治二五年三月一六日業務廃止は、大正二二年三月三一

日、佐呂間に関係深いと思うので、取り扱い人であった人の名を参考まで記しておきます。

永井友吉・遠藤藤次郎・遠藤藤太郎・

北見峠駅通は、白滝村に属しているところとなつていて、業務開始は、明治三四年四月二一日、廃止は明治三七年だから、若佐の草分けの大野団体が、明治三九年四月に愛別を出発して、北見峠を通り、北見峠駅通に差しかかり、四月八日にその駅通で休んだのだが、管理人は不在であつたと、川西に在住していた、故杉山甚助が生前話をしていた。

中佐呂間駅通は、現佐呂間市街にあつたので、一番関係深いのは申すまでもない。最初の駅通の建物は、別頁の明治大正の頃の特等な施設を現らわした地図に、載せてある参考にして下さい。

業務開始は、明治三七年一月一五日廃止は、昭和四年六月三十日と記録がはっきりしている。取り扱い人は左の如し

中野判次郎・長船慶喜・栄喜太郎・栄時治  
廃止当時は、現中心街の堀口商店のところに移転していたという。

下佐呂間駅通は、現在の浜佐呂間市街内の仁倉から常呂町に向つて行く、道道と、国道二三八号の交わつた、号線零号のところにあつた。

業務開始は、明治四一年六月二十日で、業務廃止は、昭和五年六月十日と記録されている。取扱い人は。

大沢平太郎・大沢又市。

トコタン駅通所は、国道二三八号が、富武士より中湧別に通つて行く線の海岸側に、佐呂間市街から来た道が、二三八号に交差したところの海岸側の、トコタン川の西側に、最初建物を建てて業務をしていたが、後に国道のやはり海岸側だが、床丹浜に行く道の東側に移転した。

業務開始が、明治四一年七月二十日、廃止が昭和五年六月十日で取り扱い人、栄慶太郎と記録されている。

### 駅通について

駅通は、遠く本州・四国・九州等からの移住者にとつては、物心両面の支えである上に精神的に、はじめて内地から来た移住者にしたら、そこに人が住んでいるということは、気持ちの上でも大変助かる。郵便局の代理もするし、旅館のようなこともし、旅人の中継地でもあつた。馬も常に備えていたから、荷物運搬にも借りることが出来、奥地の開拓に入つた移住者には、なくてはならない開拓当時の施設であつた。取扱い人は、手当てが少ないので自から島を拓いて、作物を自給自足に近い生活もしていたと伝えられている。

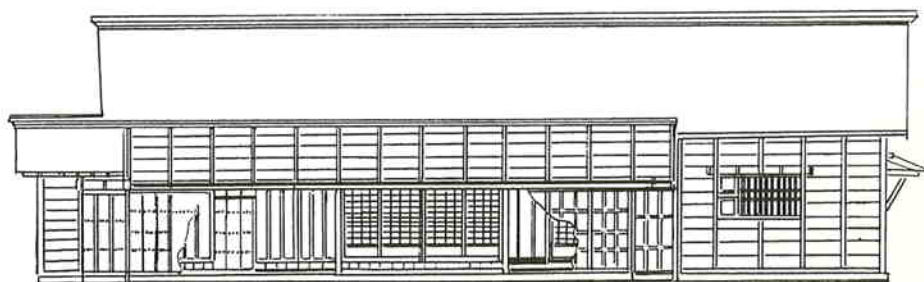
(道立図書館の資料参考にしました。この資料は現在端野町在住谷口重雄氏提供)

文責 徳永 良行

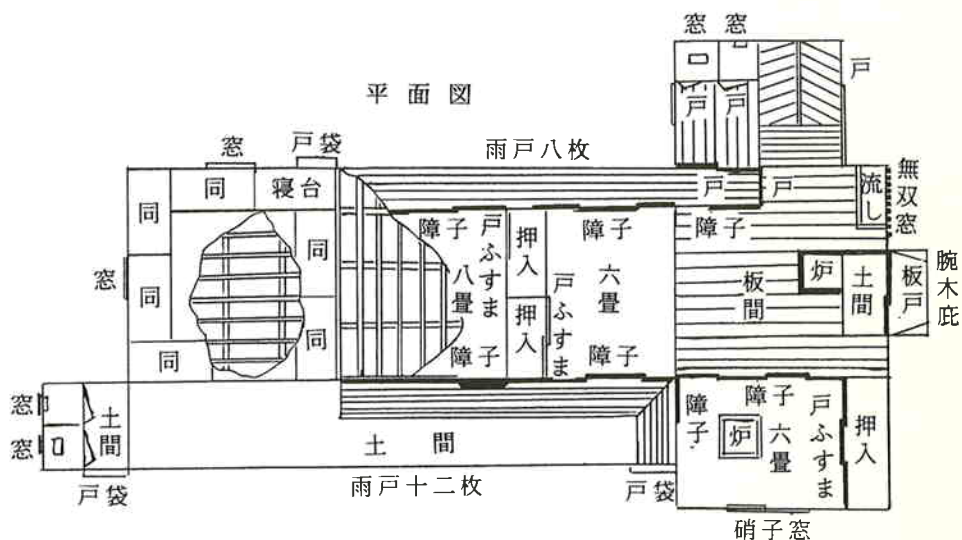
常呂郡錨沸村 佐呂間駅舎図面

駅舎

正面図

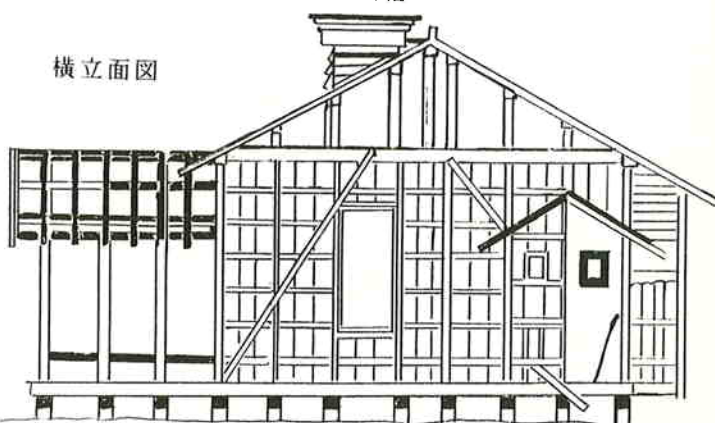


平面図



煙出櫓

横立面図



元留辺薬町郷土研究会長 谷口重雄氏提供 留辺薬町史昭和60年発行 P 61・62 (煙出櫓) の注記文字等は時代色が現れていますね。

